

振り返ってよく過ごして来たと思うのです。

昭和四十年を過ぎた頃から漸く心が落ち着くようになりました。

樺太引揚者の断片

北海道 吉川 金次郎

大正三年四月、小樽港から北海道砂川町吉野で農業を営んでいた。私の一家が樺太に渡ったのが私が五歳のときでした。

それから昭和二十二年一月に当芦別に住みつくまでの樺太で過ごした歳月のあまりにも多くの出来事はとてもこの限られた紙面で語りつくせるものでない。

私には兄が三人と姉が四人で。私は末子である。樺太に渡ったときは父母に三男と四女に私と五人であった。

今は父母を初め兄や姉たちも既に他界して、常に病弱で心臓の持病とも、やがて十年余りもつきあいながら、今日まで生きられたのである。

樺太に渡った当時は盛んに開拓のため移住民を募集していたので父母は多分それに応じたことだったと思う。

そして入植したところは東海岸の近くで皆岸であった。やがてその皆岸も豊富な木材資源の伐採が盛んになり好況が続き札幌にいた長女も呼び寄せ宿泊所や雑貨商も初め土地も更に一戸分を払下げを受け住み込みで働く人も二人雇ったが、とても仕事に追われて小学校にも恐らく年間三分の二くらいしか通学できなかった。それから父が大正十一年に他界し三男も自営することになったのと四女も嫁したので、宿泊所も店も土地も長姉夫婦に譲、そして昭和四年に皆岸産業組合に住み込みで、母と二人で働くことになりやがて、昭和九年に妻を迎えた、それから十三年に皆岸産業組合を退職して、豊原市に転出して樺太農業会に勤めることになった。やがて第二次大戦が次第に激化し方一間宮海峡が封鎖されても、島民の食糧確保に全精根をつくしたことは生涯忘れることができない。

樺太農業会で昭和二十年八月終戦を迎えるまでの八年間は私の八十年の人生で再び得られぬ人生の花道であっ

た。そして二十年八月二十日午後二時に樺太農業会のトラックが倉庫に残された農機具を北海道に送るのに漁船を雇ったので家族を、その密航船で行くので大急ぎで若干の衣類と食糧を持たせて、二十一日午後一時半に、迎えに来たトラックに乗せて大泊から北海道への密航の旅に立たせた。

それから翌日ソ連機二機が豊原を襲い。無差別に爆弾投下、焼夷弾、機銃掃射と、長い時間感じたが、それは一時間くらいであつただろう。この空襲で火の手は各所から発生し、ただ防空壕でソ連機の去るのを念じるばかりであつた。

このときの空襲で私の家も一瞬に焼失したので、市街の南端の大沢に土地を求めて疎開小屋を建ててあつたので、その小屋に行つて夜を明かそうと思つて行つたが、市街が焼ける火の手は天を焦がすかのように染めて、それに、ときどき何かが爆発する地面もゆるがす轟音にとでもその小屋におられず、焼けて独特の異臭と煙がまだ残っている焼跡に立って子供等が遊んだ頑具の原型を止めない残骸を見たときは胸が痛くなつた。やがて樺太農

業会の諸設備も残つた職員も夫々徴用された私はソ連民政局の命で農産物供出局に徴用されて、アリモフ司令官と大津長官との連名の命令書を持って馬齢薯と燕麥を全島各農業会と町村長宛に手交すべく、各地を回つたが、交通の便が全く乱れ、敷香から南下して馬群にはいった頃はもう真暗くなりソ連の検問隊に銃を持つソ連兵が二人いるところを通り越したときはもうこれが最後だと思つた事も再三であつた。

そんな過程をへて今日まで行き永らえたことは奇跡のようない気がする。

ポンポン船で密航

北海道 高畑 宏

樺太で生れ豊原市で終戦を迎えた私の八月十五日は、豊原工業学校に在学していた。正午に玉音放送があるというので、全員が講堂に集められました。

雑音がひどくラジオから流れる終戦の詔勅は、内容が